

“冬”に咲かせる“技”



①枝切り

11月、成長した啓翁桜を切り出す。5月に「環状剥離」という花芽をたくさんつけるための作業を行っている枝を切り出す。



②休眠

12月中旬には啓翁桜が咲くために必要な休眠時間に達する。保管していた枝を順次掘り出していく。



③休眠打破

40度のお湯に1時間沈めて、花芽を目覚めさせ、春の陽気と同じ気温の温室に20日間程置く。



④出荷

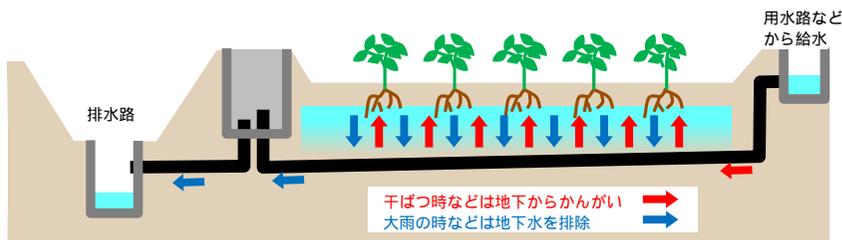


蕾が膨らみ始めたら出荷。小倉地区ではJ Aを通じ、年内は関東地方、年明け以降は関西地方へと出荷する。



小倉地区の啓翁桜は約6ha。畑からは上山市内が一望できる

水田畑地化とは



水田で畑作物（転作）を安定生産するために、地下かんがい施設を整備すること。これにより、排水対策と地下からのかんがいの両面の機能を得られ、大雨や干ばつに対応。収量、品質、作業性がUPする。

違いは？桜・梅・桃の花びらの形

品種により違う場合もあります

桜



花びらは楕円形で先が割れている

梅



花びらは丸い

桃



花びらは楕円形で先がとがっている



工藤庄一郎さん（右端）と
蔵王花木研究会のみなさん

啓翁桜

（上山市小倉地区）

〜水田畑地化をきっかけとした導入〜



雪深い山形で、冬期間の収入を確保するにはどうしたらよいか。

蔵王山麓に位置する上山市小倉地区では、ほ場整備と同時に水田畑地化を行い、啓翁桜の作付けを始めた。

それまでは冬の収入源と例えば蔵王温泉への出稼ぎだった。蔵王花木研究会の工藤庄一郎さんは「啓翁桜を始めて冬期間の仕事が生まれた。一般的な花木と比べて手間がかからず、出荷作業なども含め、年配者にも負担が少ない。導入してよかった」と話す。一般的な畑作物に多い連作障害も、啓翁桜では発生しにくいことも作り易さのひとつ。

山形県内では昭和40年代半ばから啓翁桜の促成栽培に取り組み、今では全国1位の生産高を上げている。お正月の飾りや卒業式などの特別な日を彩る花としてだけでなく、フラワーアレンジメントなど日常を彩る花としての人気もあり、12月下旬から3月下旬にかけて全国に向けて出荷される。